

ヤマトコトバと古代語

木村 紀子

要 旨

記紀万葉等の最古の文献に遺る、漢語およびごく一部の半島出自と見られる語以外の言葉は、総じて一般にヤマトコトバ（和語）と呼ばれている。それらに、平安初期のかな資料等も含めて、判る限りの「古来の和語」について、とくに注目されるのは、同音異義語と同義異音語の多さである。ヤマトコトバとは、大和政権の人々の言葉でもあったが、そうした一言語圏内で、たとえば山をヤマ・タケ・ネ、土をツチ・ヒチ・ニと言いつける、あるいは混用する必然性は、どこにあったのだろうか。

本稿は、漢字伝来以前の遠い昔、言葉とは声ばかりであったこの列島上で、いくつかの言語圏の出会いと交わりがあって、大和政権の人々の言葉を軸に混成・融合したものが、いわゆるヤマトコトバであるといふことを、「混成した男女呼称の問題」多様な大数の整序の問題、葛 という字の多訓の問題」の三点に絞り、考察、実証したものである。それによって文献の背後に広がっていた列島の古代語の多様な世界への視野を、開いてゆきたい。

一 女・男呼称の混成

「男・女」というと、現代日本語では、言つまでもなくオトコ・オンナのことである。しかし、いわゆる記紀万葉等の最古の文献で、音の確定できる仮名の例では、必ずしも男・女の対がオトコ（ヲトコ）とオンナ（ヨミナ）として出るわけではない。

ヲトメラにヲトコ立ち添ひ踏みならず 西の都はよろづ代の宮

（続紀歌謡 宝亀元年三月）

ヲトメラが ヨトメさびすと 唐玉を 手もとに 巻かし……

ますらをの ヨトコさびすと 剣太刀 腰にとり佩き……

（万葉 卷五 八〇四）

遠き代に 語り継がむと 処女墓^{ヲトメ} 中に造り置き 壮士墓^{ヲトコ} 此のも彼のものに 造り置ける 故縁聞きて（万葉 卷九 一八〇九）
古へ、年少き童子ありけり。俗、かみのヲトコ・かみのヲトメと云フ。
（常陸国風土記 香島郡）

並、大八洲二像かたどりて、八乎ヲトコ止古八乎ヲトメ止咩定テ 神管大管等二仕奉始キ。
(高橋氏文)

これらによる限り、ヲトメにはヲトコが対するというのが、当時のかなり一般的な語感だったと見られるだろう。なお、ヲトコとヲトメのどちらを先に言うかは、伝承言語である歌はヲトメが先だが、漢文の散文になるとヲトコを先にしたようである。万葉集には、

秋野には今こそ行かめ もののふのヲトコヨミナの花匂ひ見に

(卷二十一 四三二七)

というヲトコにヨミナ(オンナ)が対応する一例もあるが、集中ヨミナの仮名の例は、ヨミナベシ(女郎花)の場合を除けばこれが単独例で、この歌も、作者大伴家持がヨミナベシを歌う直前の四三二六番歌に続けて、あえて「ヨミナの花」と詠んだと見られるものである。

他方ヲトメは、万葉集ではごく一般的な用語で、仮名書きの他、「処女・未通女・少女・嫉婦」等の用字の定訓ともされて多出する。ヲトメは、特に恋心を歌う対象ともなる、うら若い未婚の女性を指し、独特の雅語(歌語)的語感も生じて後世に伝えられた。記紀歌謡でも、

大和の 高佐土野を 七行く ヲトメども 誰をし枕かむ

(神武記)

三つ栗の 中つ枝の ほつもり あからヲトメを いざささば
よらしな
(応神紀)

道の後しり こはだヲトメを 神のごと 聞こえしかど 相枕まく
(応神紀)

天飛あまたむ 軽ヲトメ いた泣かば 人知りぬべみ はさの山の 鳩
の 下泣きに泣く
(允恭紀)

等々、万葉集とほぼ同様の用法と見られる。

ところが、同じ古代歌資料でも、神楽歌・催馬楽では、

ささなみや 志賀の辛崎や 御稻みじね搗く ヲミナよさ さや

それもがな かれもがな 愛いと子こ夫せに ま愛子夫にせむや

(神楽 小前張)

ヨミナ子の才さえは 霜月しはすの かい壊こぼち

………さ衣かたぬに 織りても着せむ 汝妻ましめ離れよ

(神楽 早歌)

頑かたぬに もの言ふ ヲミナかな

と、ヨミナは出るが、ヲトメは見られない。最初の「小前張せまへはり」の場合

など、神饌の米を搗く若い女なのだから、いわば田植えの「さヲトメ」と同様「ヲトメ」であつてもよさそうである。しかし、何らかの神事

に関わる口承の歌として、この場合はそうは伝わっていないかつたということだろう。また、先に挙げたようにヲトメ主流の記紀歌謡中に

も、古事記のみに二例ヨミナの例が見られる（書紀は類歌も含め不採用）。

この蟹や いくつかの蟹……………木幡の道に 遇はししヨトメ……………
 遇はししヨミナ かもがと 我が見し子ら……………（応神記歌謡）
 吳床座の 神の御手もち ひく琴に 舞ひするヨミナ 常世にも
 がも （雄略記歌謡）

応神記の「かもが」という求愛の歌は、いわばサイバラ（異族間の出会いもある開放的な歌祭り）的に同義別語で反復する用法（小著『催馬楽』平凡社東洋文庫 解説・注解参照）と見られる。また、雄略記の方は、歌の前文に、吉野行幸の折出遭った在地の美しい「童女」を召して、天皇自らの弾琴に合わせて「其の嬢子」を舞わせて歌ったとある。古事記では「童女・嬢子」は幾度か出て、「媛女・少女」などと共に、一般にはヨトメと訓まれている。地の文では、各所の在地の女性を指す「女・女人」の場合が、概してヨミナと訓まれている。なお、先の神武記・応神紀でのヨトメの場合も、同一人を指している前後の地の文では、「媛女（神武記）・嬢子（応神紀）」とある。ヨトメとヨミナは、同義だが、出自の違う別語であるとの認識ともとれるだろう。

語音の組成から見ると、ヨトメ・ヨトコは、一見ヨトという部分を共有し、メとコとで相対応している。それは、記紀に、佐保ヒメ・佐

保ヒコ、吉備ツヒメ・吉備ツヒコなどと出てくるヒメ（日女）とヒコ（日子）との対応に繋がるものでもあるだろう。あるいは、ムスメ・ムスコ、ヨメ・ムコなども、音の上から見れば同系の対応ということだろう。それらとも並べて見ると、男・女のヨトコに対応する語は、まずは、ヨトメだったと見られる。ならば、ヨミナは、一体どのような出自の用語だろうか。

若い男をいう古代語の一つにヨグナというのがある。

是の小稚尊は、亦の名は日本童男。童男 此をば烏具奈と云ふ。亦是日本武尊と曰す。
 （景行紀二年）

この語の古代文献上の確例は、ほとんどこのみ（記、倭男、具那命）で、他には、神代紀上の終局部で少彦名命を指す「小男」の一訓にヨグナを宛てる場合等がある程度である。

折口信夫は、これらの語に関して、「おきな（翁）・おみな（媪）」に対して、「をくな・をみな」があり、「お（大）・を（小）」の差別がき（く）・み（む）の上につけられてゐる」として、「老若制度から出た社会組織上の古語であつたらしい」という見解を述べている（『翁の発生』昭和3）。さらにその後、このヨグナという語に深い思い入れをもつて、『倭をくな』という自らの短歌集に戦中・戦後の時代の思いを昇華させさせた。

オキナ・オミナとヨグナ・ヨミナが老若男女で対をなす語群である

うとの見方は、現行の辞書類にも記されている。しかし、そうした整然とした語彙のシステムがあったとして、なぜ中でヲゲナのみが、早々に（おそらく奈良時代には）使われなくなっていたのだろうか。

ところで、これらの語群について、語尾「ナ」が同一という点に注目すれば、同様な語尾で人を指す語には、他に「オトナ」というのがある。

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけるを、オトナになりければ、おとこも女も恥ぢかはしてありけれど、おとこは、この女をこそ得めと思ふ。女は、このおとこをと思ひつつ、おやのあはすれども、聞かでなんありける。

（伊勢 二二三段）

「おとな」は、右の用例ながらの成人男女の意で、現代もごく普通に使う語である。ただし、記紀万葉等の奈良時代の文献には用例が見えず、和名抄の和訓にも挙がらない。中世文献の用例等では、共同体内における主だった人とか代表者といった意味合いが強く出るものもあるが、オトナとは、当然古今を通じ社会の中心を成す人々のことだったであろう。文献上に用例がないからといって、右の伊勢物語で突然出現したなどはとても考えられない語である。

オトナの存在に注目すると、問題の語群が、「老若の制度」を踏まえるというよりも、いわば「老・壮（オトナ）・青」という年齢的社

会構成を言い分ける呼称としてあったと見られるだろう。ならば、残る「幼」の呼称もあつてよいのではないか。

「幼」とは、その字の通りヲサナである。ただし、この語は、

いとヲサナケレば、籠に入れて養ふ。 （竹取）

というように、一般に「ヲサナシ」という形容詞で用いられる。ただ、オサナイあるいはオサナという形で幼児をいう例が中世以降の文献に見られること、「ヲサナ ゲ・ヲサナ プ・ヲサナ子・ヲサナ心」といった熟語に対応する形でヲサナに替わる語が、「オトナ ゲ（ナシ）・オトナ プ・ヨミナ子・女心」というように名詞であることなどから見て、あるいは、本来ヲサナでヲサナゴの意としてあつた可能性もあるものだろう。ちなみに、オトナも、「おとなしき人」（蜻蛉上・大鏡一）等と形容詞化して用いられ、現代語の「おとなしい」は、オトナ（大人）とは別に物静かな意の形容詞に落ち着いている。

また、「ナ」には、万葉集の東歌・防人歌などに、「せ（兄・背）せナ」「妹 妹ナろ」「子 子ナ」「手児 手児ナ」というように、親愛の意を添えるとも見られている独立的な接尾用法がある。人の呼称に接尾する点、意味成立の最小単位は、本来一音節か二音節である点などから、同根ではないかと見られるが、それ以上のことはよく分からない。

さて、とりあえず以上の「ナ」群の呼称をあらためて整理する

と、しぎのよしである。

老 青 幼

女 おみな(おうな) をみな(おんな)

おとな をさな

男 おきな をくな

壮・幼で男女の別がないのは、ヒトのありように対する当言語圏のそれなりの認識が窺われるだろう。そしてまた、こうした整然とした呼称の完備状態からは、この呼称の行われていた社会集団の一定の安定度も窺わせるものもある。なお、オミナ・ヨミナは、平安期以降オムナ・ヨムナあるいはオウナ・ヨウナ(オンナ)と、語中音が音便化して、ム・ウンで書き取られ、その形が、改めて文字で読まれた発音で一般化している。同様な音便表記には「カミナギ(巫)」の「カムナギ・カウナギ・カンナギ」があるが、いずれもミの音を口の動きを節約して曖昧音にした音便化の、正書法のない時代の書き取り方の違いで、ム・ウンを後世文字で見て発音するような、音の区別あるいは変化があつたというわけではないだろう。

さて、右の一覧中、傍線を付けたオトナ・オンナは、現代日常語にも残った語である。ヨサナもオサナイという形容詞で用いる。オキナ・オウナは文語ないし雅語的な語感があるが、希に用いられる。しかしヨグナだけは、書紀の「日本ヨグナ」以降、実用例は目に入らな

い。

先に挙げた伊勢物語の頃、ないしそれ以前から、ヨグナに替わりその位置にあるのは、言うまでもなくヲトコ(オトコ)である。万葉集でも、ヲトメ・ヲトコと仮名の対で出るもの以外に、「男・勇士・壮士・士・丁子」などが一般にヲトコと訓まれている。なお、これらには、ヲノコの訓もある。ただし、万葉集の各種訓読でのヲトコ・ヲノコ訓み分けはいささか場当り的で、確かな基準を踏まえているとは見られない。ヲノコに関しては、後にまた触れるが、とりあえずここでは、文献以前にあつたと見られる「ナ」の語彙体系中に別系統のヲトコが(ヲトメを伴い)入り込んだとも見える、古代文献言語(いわゆるヤマトコトバ)の混成状態の一面を確認しておきたい。

ところで、男・女を対で言う古代語には、また、メ(女)とヲ(男)の一言語による場合がある。

八千矛の 神の命や あが大国主 汝こそは、ヲにいませば ……吾はもよ メにしあれば 汝を置きて ヲはなし 汝を置きて 夫はなし (神代記)

寺々の女餓鬼申さく 大神の男餓鬼給はりてその子産まはむ

(万葉 三八四〇)

このメ・ヲは、右の万葉の例、あるいは「メ神・ヲ神」「メ(牝)

鹿・ヲ(牡)鹿、「メ鳥、ヲ牛」といった個体の男・女、雌・雄の別を単純に接頭して言い分ける形、また、「葦原しこヲ・黄泉つしこメ、すさのヲ、天のつづメ」等々の具体的な神名にはじまって、「手力ヲ・手弱メ」、「ますらヲ(丈夫)・さつヲ(獵夫)」、「うねメ(采女)・なきメ(哭女)・あやメ(漢女)」といった、種々の職能や性格を限定する語に下接する形、あるいは「河内メ・山代メ・初瀬メ」と所々の女をいう場合、「ヲたけび(雄叫)・ヲよそひ(男装)・ヲざかり(壮子時)」等、接頭させての性の強調など、いわばどんな語にでも付いて、単純明快に男女、雌雄を言い分ける機能を果たす語である。

荒雄らは妻子のなりをば思はず 年の八歳を待てど来まさず

(万葉卷十六 三八六五)

といった、「メ・コ(妻子)」「といつ結合(ちなみにヲ・コとは言わず、ヨミナと子どもとの意のコの連結もない)にヲが対応するとすれば、メ・ヲおよびコ(子)が一連の語彙(動物ならばたとえば牡牛・牝牛・子牛)かと思われるが、それ以上の社会(家族)関係には、少なくとも語音の相関においては展開していない。そうした点でも、もっとも素朴かつ原初的な語群と見なしうるものだろう。現代語にも、接頭・接尾の用法が生きているところからは、この列島で数千年の命脈を保って来た可能性さえ見える、もつとも古層の語群でもある。

ところで、大・小を言う語には、オトナ系の語群におけるオとヲと

があり、「オホ前・ヲ前」「大碓・小碓」「大野・小野」等々の対応語もあつて、現在も地名や人名によく残っている。ところが、古代語には、別に、現代語同様のオとコによる大小の別も並存しており、「小舟」は、ヲフネ・コフネどちらの言い方もある。メ(女)・ヲ(男)言語圏において、同じヲ音で別語の「男」と「小」を並立させる可能性は少ないから、オ(大)・コ(小)は、こちらの言語圏のものかと思われる。

さて、コは、おそらくメ・ヲ古層言語圏での子でも小でもあつて、当然小さく可憐な者達を指す語として、親愛の称ともなり易い。「メのコ・ヲのコ」「ヨミナゴ・ヨサナゴ」「ヲトメコ」「イモ(妹)コ・セ(兄・背)コ」「チゴ(小兒)」と、コを下接する形は、さきのナを下接する形よりも、万葉集等において、もはや語の出自と関わりなくより一般化している。ただし中でヲノコについては、万葉集当時、愛称というよりも、漢語の「男子」さらに「丈夫・壮士」の意を思い入れた用法になつた風でもある。和名抄では、男女類の「男子・男」がヲノコ、夫妻類の「夫」がヲトコとされている。ヲノコのそのような用法は、おそらく政権中枢部の男たちの漢語感覚の思い入れで用いられた、一時的な用法であつた。

古代の女・男の呼称には、さらに右にも触れたイモ(妹)・セ(背)もあり、海人系の母系イロ集団出自の語群として、かつて詳しい考察をした(「神話記号としての母声の伝承」奈良大学大学院研究年報4、「古層日本語の融合構造」平凡社所収)。その構造等についてはこ

ここでは省略するが、本来は、天照大神とスサノヲノ命、佐保ヒメと佐保ヒコ、軽太子と軽太郎女といった、同母姉または同母兄妹の（結婚はタブーの）濃密な関係に発する語である。万葉集では、大伯皇女が、同母弟大津皇子を思いやつて、

吾がセコを倭へ遣ると 小夜更けて 暁露に吾が立ち濡れし

（巻二 一〇五）

うつそみの人なる吾や 明日よりは二上山を弟せと吾が見む

（同 一六五）

と歌ったのが本来の語感を曳くいわば最後のものである。万葉集の多くのイモ・セの用例は、本来の意味は薄れ、すでに一般の男女関係での愛しい人の意で、「ワギモコ（吾妹子）・吾がセの君」等々と用いるが、日常語としての活発な使用は、その頃にほぼ終焉を迎えていた。

以上、古代初期文献上に混成する女・男呼称のおおよその整理を試みた。それらのうち、文献を残したヤマト政権系の人々の本来の語彙（狭義のヤマト言葉）は、ヲトメ・ヲトコ系統であつたらしいことが、記紀歌謡や万葉集の歌語における右に見てきたありようからある程度推察される。景行紀の表記「日本童男」から見ると、いかにもヤマト言葉らしいヤマトヲグナとは、地名を被せる「山城メ・難波ヲトコ・檀原ヲトメ・三重のコ」等々から類推しても、どこどここの地の男・女

といった部外からの呼称だった可能性が高い。その場合のヤマトとは、日本国家以前の奈良盆地南東部の山沿い地域のヤマトのことで、ヤマトヲグナとは、当の小碓尊の母方の在所である吉備・播磨あたりの人々からの、たとえば「豪家の若様」といった風な呼称だったと考えられないだろうが、折口信夫の思い入れに水を差すような解釈だが、そうでなければ、なぜヲグナがヲトコに排除された語彙システムが出来たかの辻褄が合わないだろう。

平安期のかな文では、先の伊勢物語や、古今和歌集の仮名序・詞書などでも、ヲトコに対しては、もっぱらヨム（ウ）ナとなっていたようである。いささか断言しにくいのは、「女」の字画が簡単なため、各種写本において、男は「をとこ」とかな書きされても、女はそのまま漢字で書かれ、実際は、それを「ヨムナ・ヨウナ・ヨンナ」ばかりでなく「メ（妻）」「ムスメ（娘）」などを適当に宛てて読んでいる。ただし、ヲトメと読まれることはないようである。ヲトメは当時もすでに日常語ではなく、

天つ風雲のかよひぢ吹きとぢよ ヲトメの姿しばしとどめむ

（古今集 八七二 五節の舞姫を見て詠める 良岑宗貞）

といった、いわばプラトニックな思い入れの語感を持つ語になっていたと見られる。

二 大数の整序

茫漠とした古代日本語について、文献以前の長い声の時代の混成・融合の実態を、この章では、大数の用語から考察してゆきたい。

現代日本語では、数の位取りは、「一・十・百・千・万」を音読で言う。あえて訓読すれば、「ひ・とつ・もも・ち・よろず」であろう。記紀万葉成立の時代、すでに租税徴収や土地の測量等に関して、百位・千位の大数も厳密な数値で用いていたと見られ、それらに関わった官人達の日常用いていた音が、漢字音か和語音かは不明にしても、万あたりまでの位取りはむろん明確に認識していたと思われる。

ところで、万葉集の歌の世界での大数は、たとえば、

葦原の 水穂の国に 手向けすと 天降り坐しけむ 五百万
 千万の神の 神代より 言ひ続き来たる (巻十三 三三二七)
 百千遍恋ふと言ふとも 諸弟らが練りの言葉は吾れは信まじ

(巻四 七七四)

この道の 八十隈ごとに 万たび 顧みすれど (巻二 一一三)

などとあるが、これら「五百万・千万・百千・八十・万」といった数値が、そのままの実数であるはずもなく、どれも多数であることの強調表現であろう。高天原の神々は、一般に「八百万の神々」として知られるが、その言い方とも同列の、漠然とした大数表現である。しかし、

実数の前提のない、そんな過剰な多数表現が、いわば神ながらの大きから、なぜありえたのだろうか。また、百に相当する語には「モモ」とともに「ホ」という音があつたようだが、実数名がホでなくモモになつたわけが、何かあつたのだろうか。

一般に、文献上の古代語で、もつとも古そつな大数あるいは多数表現は、「や(八)」だと見られている。

ヤ雲たつ 出雲ヤ重垣 妻こみに ヤ重垣造る そのヤ重垣を

という、スサノヲノ命が、出雲に宮居した際の歌だと古事記に記される歌語をはじめとして、ヤは、「八尋殿・大八嶋・八尺の鏡・八重事代主神」等々と神話中の特別の語に冠せられるので、(神) 聖数などと言われることもある。これらヤ(八)をはじめとして、もろもろの多数表現が、本来どのような数あるいは量として表現され、いかに実数として位置づけられたかを知るには、古来の口承を生かして書きとつたと序文で言う古事記上巻の神代の物語を、まずは、手掛りにするしかないであろう。そこで、その神代記から、大数表現と見られる語をすべて拾い出し表示することから始めたい。

表は、とりあえず語りを大雑把な段落に分け、見やすさの便から「百未満」の数と「百以上」の数を二段にして提示した。生成した神々の数を総括注記する場合等、明らかに実数的なものは除外した。十

語りの段落	百未満	百以上
1 イザナギ イザナミ 国土・神々生成	八尋殿 大八嶋国 十拳劍	
2 黄泉国往還	(十拳劍) 八十禍津日神	千五百の黄泉軍・千引石 千頭・千五百産屋 千人 千五百人
3 天照大神 スサノヲノ命 競い合い	八拳須 八尺の勾穂	万物の妖 五百津の美須麻流の珠 千入の鞆・五百人の鞆
4 天照の石戸隠り スサノヲ追放	八尺鏡 (八尺の勾穂)	万神の声・万妖 五百津の美須麻流の珠 五百津真賢木 八百万神・千位置戸
5 出雲 ヲロチ退治	八稚女・八俣ヲロチ 八頭・尾・谷 八塩折・門・サズキ 八雲・八重垣 八耳神・八島ジヌミ神	
6 大国主命物語	八十神・八上ヒメ (八耳神)・八島ムチ神 八田間大室・八河江姫	八千矛神 五百引石
7 葦原中国平定	十掬劍	豊葦原の千秋長五百秋 (八百万神)の水穂国
8 出雲の国譲り	八重事代主神 櫛八玉神 天の八十ヒラカ	百足らず八十くま手 百八十神・(千引石) 栲縄の千尋繩

天孫降臨	9	天の八衢 八重タナ雲・(八尋殿)	万幡豊秋津師ヒメ 高千穂・百取机代の物
海幸山幸	10	(十拳劍)・豊八重 八尋ワニ・五瀬命	五百鈎 一千鈎 (百取机代物)

以下の数の場合、「八尋殿・十拳の劍・八尺の鏡・八尋ワニ」等は、単位的な承接語の意味と実態をよく考えてみると、あるいは実数的かとも思われるが、一応拾い出した。神名中に含まれる場合は、概して特別の思い入れがあると見られるため、すべて拾った。出雲の八俣ノヲロチに対応して出る多くの八のつく語は一括略記した。同一対象が同一段で反復される場合は、一例のみ挙げたが、同じ用語(同一対象とは限らない)が別の段中に出る場合は、カッコに入れて再度挙げた。

さて一見、「八」を中心に、どの段にも様々な大数が混在している風でもあるが、整理番号の5・6・8および9の一部のいわゆる出雲神話の段と、その他の段(とりあえず高天原神話とする)に分けてみると、明らかな出方の違いが見てとれるであろう。すなわち、出雲の段の大数用語は、神名にも頻用されて聖数とも見なしうる「八」を中心に、それをさらに大数化した風の「八十」、および8段に「八十」と共に出る「百八十・百足らず八十」の「百」とにほぼ限定されている。それに対して高天原の段では、「千」とその半分の「五百」との対応、両者を合わせてさらに大数化した「千五百」が、用語の中心である。「万」もまたこちらの語だが、用例の出方に見る限り「千五百」に比べ主要語とは言えない。

ヨロツは、現代語でも「よろず相談」といった、「何でも皆・すべて・もろもろ」などの意の副詞的な用法を残している。古代語の例でも同様の副詞用法と共に、先に挙げた万葉集の「五百ヨロツ・千ヨロツ」、そして「八百ヨロツ」(神)、「さらに「八十万神」(神代紀下、記の「八百万神」に対応する書紀の用語)、「百万」(神武即位前記)、「ヤヨロツ」(八万) (仏足石歌) などと、いわばよろずの大数に下接して用いられる例がある。それは、万という大数というよりも、「ありとあらゆるすべて」といった総括の意を強調するものだろう。すなわち、3・4段の「万物の妖・万妖」とは、あらゆる(もろもろの)「わざわざい、「八百万神・八十万神」とは、もろもろのヤホ神あるいはヤソ神たちすべてということであろう。書紀の相当箇所地の漢文では、「八十万神」はもっぱら「諸神」という語で繰り返し返されてもいる。

ところで、「百千たび」(万 七七四)、「八千矛神」の「千」のありようを見ると、あるいは千にも類似の用法があつたのかも知れない。

をとめの い隠る岡を 金鉏も 五百千もがも (雄略記歌謡)

という古文献上単独例のイホ千の「千」は、一般に「箇」の意とされているが、「五百千」の可能性も考えられるだろう。大数の音は、願わしい呪言的な音でもあって、相互に結合させればその呪言(言霊発現)効果がいや増す感もあつたのではないか。ただ、千は、「千々に碎け・千々に乱る」「千鳥・千草」等の語の展開からも、小さな同類

のもの沢山をいう感触のある語でもあり、表中の古事記の例でも、千といわれるのは、民草や矢や鉤(つりばり)などである。とくに、最後の例では、「十拳劍」を破砕して「五百鉤」さらに「千鉤」を作つたと、もしかして実際ありそうなりアルな表現もなされている。

また、8段に出る「千尋繩」は、火を鑽る儀礼での長い禱言の中で、
 ……
 千尋繩の 千尋繩打ち延へ 釣為る海人の……

とあるものだが、万葉集でもそのまま「栲繩の千尋」(巻五 九〇二)と用いられ、「千尋の底」というと海底のことでもあり、ヒロという単位(両手を体の横いっぱい広げた幅)ともども、もとは海人族から出た語である可能性が高い。9段の「八尋フニ」も、直前に「己が身の尋長」によって泳ぐ速度を申し立てる「一尋フニ」の語りもあるところからは、漠然とした大数というよりも、実在もするジンベエザメのような大ワニの実測的実数のようでもある。さらに、想像を逞しくすれば、千と五百との対応には、大量とその半量(片手指のホド)といった、大漁の魚の山分けの目安などが反映していたかも知れない。

なお、「万幡豊秋津師ヒメ」は、書紀本文では、「栲幡千千姫」とも呼称され、「万」と「千々」とはいわば同義風でもある。いずれにせよ、数の実感からは遠い呪言的な誇大表現だった。

他方、神代記以外に相当の用例もある。「五百」は、右表の「イホツのみすまるの珠・イホツ真賢木」や、人名の「五百城入彦皇子・五百

野皇女（景行紀）」などからすると、もともと数でなく、「イ垣・イ串」などのイ（斎）と、秀でて目立つ意（後に詳述）の水（秀）とが結合したイホに、海人系の大多数のイホが習合したようにも見られる。右の「イ串」は、「五十串」（万三三二九）とも書かれており、逆に五百や五十にそつした意味が感じられる故の宛字だったのだろう。

ヤマト族の祖先とされる高天原文化と、海人文化との融合は、出雲文化との出会いに比べ、おそらくより古層をなしていると見られるが、万幡豊秋津師ヒメという神名に含まれるヨロツ、および出雲に「国譲り」を迫り、「十掬剣を抜きて、逆に浪の穂に刺し立て」とある、いわば高天原の権威と力の象徴「十掬剣」のトとは、高天原系とみなしてよいものだろう。

なお、「十」の音については、トと「ヤソ」のソとがあり、実数として数える場合、三十以上の十はソ（甲）で言う。しかし、ソは、これも「八十神・八十島・八十氏」といった慣用語に見る限り、十といった数をいうものではなく、要するに誇大表現だろう。信濃国「木曾」のソ（乙）は、木が「ソ」だる（充足）（仏足石歌）意での通音と思われる。垂仁記に、「出雲の石祠の曾宮に坐す葦原色許男神（大國主神）」という意味不明な「曾の宮」というものが出るが、関連する音（語）かも知れない。

さて、残る百の問題、特に「八百」について。

纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の 日影る宮 竹

の根の 根足る宮 木の根の 根延ふ宮 ヤホによし い杵築の宮……… (雄略記歌謡)

という宮褒めの歌の「やほによし」は、一般に「八百土よし」と書き取り、「八百土」とは「多くの土」だというのが、諸注釈や辞書類の一致した見解である。出雲国造神賀詞に「八百丹杵築宮」という表記も見えるから、その宛字は、要するに土を何層にも杵で搗き固めた、土台の堅固な宮といったところだろうか。ところで、右の歌の続きは、

真木さく 檜の御門 新嘗屋に 生ひ立てる ももだる 槻が枝
は 上枝は 天を覆へり 中枝は 東を覆へり 下枝は 畚を覆へり
へり……… (同)

とあって、この「ももだる」も一般に「百足る」と書き取られる。となると、一首の歌の中に、ホという百と、ももという百が共存するという、妙なことにもなっている。

「百足る」は、おそらく8段にも出る「百足らず八十」とも関わるもので、同様な例の、

……… 川隈に 立ち栄ゆる もも足らず 八十葉の木は 大君ろ
かも (仁徳記歌謡)

とも見合わせると、モモとは、大数という以前に、充足して欠けるところがない、ヤソを超越する完璧な「栄え」状態を言うのではないだろうか。そうした意味で、これもまたヨロツ（万）と近似する呪言的な大数である。他方、ヤホは、ホだけについて言えば、右の「ホツ（上）枝」のホや稲のホ（穂）などにも通い、「ほつま国（神武紀三十年）・国のまほるば（景行記歌謡）」などのホでもあるような、いわば秀でてポと目立つ存在のことである。

千葉の 葛野を見れば モモチ足る ヤ庭も見ゆ 国のホも見ゆ

（応神記・紀歌謡）

という単独のホの用法が、よくその感じが伝わるものである。この歌については、関連する多くの語が出るので、後にまた検討したい。

古事記で「八百万神」の出る4段をよく見れば、知略第一の思金神おもひかねのかみに始まり、各種の個別能力に秀でた神々が、より、つどい（あるいはヨロツの本義はこのあたりか）、力を合わせて、天照の石戸隠りという一大災厄を打開したと語られる。「ヤ・ホ・ヨロツ神」とは、いわば「秀でた神々（ヤホ）の集合体（ヨロツ）」ということであって、その他有家無家の夥しい神々がいたことをいうものではない。このこととは、つぎに「八百万神」の出る「葦原平定」の段でも同様である。ホの音が美数の百にならなかったのは、ホが、本来大数をいうわけではなかったからである。

以上、様々な大数について、出自を中心におおよその検討を加えてきた。多数表現の古代語には、別に副詞的な「さは（多）・しじ（繁）・あまた（数多）・もろ（諸）・ふつく（悉）」などがあって、場合によっては「ヨロツ度・モモチ度 あまた度」「ヤソ神 もろ神」「チヂに さはに」といった風に、大数用語とも交替可能な意味を持つている。しかし、百・千・万等の数の訓になった語のそれらと異なる点は、「ヤ（八）」だけでなくすべて、何らかの願わしい呪言的な意味を持つ音であったということだろう。上に挙げた、「千葉の葛野を見れば モモチ足るヤにはも見ゆ国のホも見ゆ」という歌は、天皇（応神）が宇治野に立つて近江国をはるかに望んで歌ったと、古事記でも書紀でも同様に（それ以上の物語はない）ものだが、カタカナで示したように、もろもろの大数的呪音を詠み尽くした言祝ことほぎ・国褒めの歌である。「ヤニハ」は文献上の単独例で、一般に「家庭」と解されているが、「ヤホニ」のホを後に別立てにして抜いた形ではないだろうか。ただしニハとなると、土つちを広く平ならした労働や祭の場のことだから、広大な葛（次章で見る古代の重要植物）野の中に展開する多くのそうした二八で人々が働く様を見て、それこそが国のホ（栄え）だと称えたのである。それらの音に文字言語がたまたま死てた字に基づき、どれもこれも単に多数を言うといった解釈は、古代語の理解としてあまり適切とは思えない。

さて、最後の問題は、文字と結合したモモ・チ・ヨロツの位取のこ

とである。本義の検討からは、一定どの語もどの位にもなり得た可能性があつたとも思われる。しかし、百・千・万と位が定まつたのは、おそらくつぎの寿歌などに因るところが大きいのではないだろうか。

やすみしし わが大君の 隠ります 天の八十陰 出で立たす
 み空を見れば ヨロツ代に かくしもがも 千代にも かくしも
 がも 畏みて 仕へまつらむ 拜みて 仕へまつらむ 歌つきま
 つる
 (推古紀歌謡)

これは、推古天皇二十年春正月の天皇主催の酒宴で、大臣(蘇我馬子)が謝意を表して、杯を上げ歌つた寿の歌である。おそらく、そうした場での寿歌の古来の型に則つた歌で、歌句のすべてを大臣が臨機に創作したものではないだろう。

新たしき年の始めに かくしこそ仕へまつらめ ヨロツ代までに

(統紀聖武紀歌謡・催馬楽)

といった、ほぼ二百年後の歌句への継承性も見られる。ところでこれを、さらに神楽歌の中の「千歳法」と並べて見よう。

千歳	千歳	千歳	千歳	千歳	本
千歳	千歳	千歳	千歳	千歳	本
万歳	万歳	万歳	万歳	万歳	末
万歳	万歳	万歳	万歳	万歳	末

漢語の「千歳・万歳」や「千秋万歳」の千と万に、まさしく千とヨロツとが対応するとされたことを端的に見て取ることができる。そして、残る百は、「モモ足らずヤソ・モモ取りの机代・モモ枝榎の木・蝦夷を一人モモな人(神武前紀歌謡)」などによるモモの語感からもある程度数えられる大数でもある百あたりに、よく落ち着くところであつただろう。

推古時代とは、おそらく漢語と和語との対応、翻訳語の基本が出来つつあつた時期でもあつただろうが、右のような千・万がすべての千とヨロツに適用された結果、「八百万・百千・千万」等、妙な古代大数語彙が成立してしまい、文字の字義にこだわる後世の理解を、とまどわせることにもなつたのである。

三 「葛」の多訓と消えた「ヨロツ」

多くの草木の此の地での呼称に漢語の文字を対応させることは、もろもろの人為的事象に比べ、実はそれほど易しいことではない。同一種のものが彼の地と此の地とで共に実見されれば、ことはむろん単純である。しかし、文献上の漢名の実物が容易に実見されるとは限らず、一方にしか生えていないものもあれば、風土や文化の相違から、同一種でも別物に見える場合もある。それぞれに方言(異称)の問題も加わる。平安初期の本草和名や和名抄に出る夥しい草木の漢名と和名の対照は、長年にわたつた多くの人々の並々でない関心と労苦のたまも

のである。

ところで、それら草木の中でも、「葛」ほど古代文献上で多訓(名)を持つものは見当たらない。葛とは、現代の感覚からは、野原にはびこる雑草か、せいぜい根から葛粉が採れるといったあたりの認識であろう。「葛布」のことを思つ人もあるいはあるかも知れない。そして、これらの音(よみ)は、まずはクスである。また、「葛城・葛飾」といった地名では、カツラ・カツという音になっている。万葉集でも、

夏葛の絶えぬ使ひのよどめれば

(巻四 六四九)

剣の後鞞に入野に葛引く吾妹

(巻七 一二七二)

萩の花尾花葛花なでしこの花をみなへし……(巻八 一五三八)

などと、まずはクスが詠まれている。女が引くという「田葛」(一九四二)は、その繊維で布を織るためである。あるいはまた、

葛木の山の木の葉は今し散るらし

(巻十 二二二〇)

狭根葛 後も逢はむと

(巻二 二二〇七)

玉葛 絶ゆる事なく 万代に かくしもがもと (巻六 九二〇)

などは、同語で仮名の例のあるものもあり、音数からも明らかにカツラである。なお地名の「葛木(城)」は、今はカツラとツが清音で発音されることが多いが、古代のカツラは、楓・桂など別の木のこと

ある。ところで、巻六の作者には、葛井連大成(一〇〇三)・葛井連広成(一〇一)という名が出るが、この「葛井」はフチ井と訓まれる。後で見る和名抄では、フチ(藤)は葛類中の一項である。応神記の挿話に、秋山之下氷丈夫と春山之霞丈夫という兄弟の妻争いの物語があり、その母が弟のために、

布遲葛を取りて、一宿の間に衣・褌及び襦袢を織り縫ひ、

という記述がある。「布遲葛」は、フチカツラあるいはフチツラと訓まれている。フチツラは、おそらく、「トコロツラ(冬薯蕷葛)」「(万葉一三三三)や「アマツラ(甘葛)」「(和名抄)などから類推した訓みだろう。二音節語に直接下接するカツラは、「さねカツラ・たまカツラ・山カツラ」「(万葉集)」「えびカツラ・あをカツラ・すひカツラ」(和名抄)等、カツラという方が多い。また、二章で見た「カツ野」や「カツしか(飾)」などの地名では、「甘ツラ」等とは逆に、末尾のラが落ちている。

カツラは、神楽歌「採物」の最後に「葛 但今世不用」として、

我妹子が 穴師の山の 山人と 人も知るべく 山かづらせよ

山かづらせよ 本

深山には 霰降るらし 外山なる まさきのかづら、色づきにけ

り 色づきにけり 末

という歌が挙がる。「採物」とは、神ながらの神具として巫者が手に採る物である。神の憑り代でもある。「但シ今ノ世ニ用耳ズ」という但し書きは、神樂歌が宮廷の神祭次第として整えられ文字に書き取られた平安期、すでに「葛」については、他の「神・幣・杖・篠・弓・剣・鉾・杓」といった採物に比べて、神性が失われていたということだろうか。しかし、「深山には」の歌は、「庭燎」として神樂次第の最初に歌われる歌の繰り返しでもある。神祭の時の到来を色づいて知らせる「まさきのかづら」、由緒正しいヤマビトの神ながらの標として頭にかざす「山かづら」、神樂歌に伝承されたカツラの神性とは、そのあたりかと思われる。

頭にかざしたり、あるいはタスキに懸けたりしたカツラは、神代記紀での天照の「石戸隠り」の時、神懸りして舞う天宇受売命の出で立ちに由来するものだろう。

天宇受売命、天の香山あめのかみやまの天の日影ひかげを手次たぢまに撃うけて、天の真折まのまを縷いととして、天の香山の小竹葉こたけはを手草たてくさに結びて、天の石屋戸いはやとにウケ伏せて、踏みドロコシ、神懸りして、胸乳むねちを掛かき出で、裳もの緒をホトに忍おし垂たれつ。

(神代記)

「天の日影」「天の真折」とは、「ひかげのカツラ」「まさきのカツラ」のことである。カツラは、頭にかざすものとしては、記・紀・万葉いずれも「縷・鬘」などの字が宛てられるが、要するに本来の素材は

「葛」である。神が降りるものとしての標がカツラだったのである。ヨモツシコメに追われ、黄泉から逃げ帰るイザナミは、

黒御縷みくろを取りて投げ棄すつれば、乃ち蒲えひかづら子生りぬ。是を(シコメが) 躰みひ食む間に、逃げ行く。

(神代記)

と、頭の黒鬘(書紀)を投げ棄てることによって、逃亡の時間を稼ぐことができた。また、播磨国風土記賀古郡の条での景行天皇は、「行路の儲けと為せる弟鬘」を舟賃として度子わたらもひに与え、無事に河を渡るこゝろができたと言われている。カツラは、往古実益を持ったお守りとして、男女ともにカツ(被)き帯おびしていたようである。

ところで、右に用例も引いてきた和名抄からは、神話等とはまた異なる古代の「葛」への強い関心度を知ることができる。十巻本では巻十、二十巻本では巻二十がほぼ同内容で「草木部」とされているが、葛は「葛類」として、「草類・苔類・蓮類・竹類・木類」に並ぶ類目である。類中の標目と中に出る和名はつぎの通りである。

葛(クスカツラ)・藤(フヂ)・皂莢(カハラフヂ)・馬鞭草(クマツツラ)・弓窮(オムナカツラ)・五味(サネカツラ)・紫葛(エヒカツラ)・防己(アヲカツラ)・忍冬(スヒカツラ)・千歳繁(アマツツラ)・絡石(ツタ)・百部(ホトツツラ)・細子草(クソカツラ)・通草(アケヒカツラ)

この記事からは、カツラは、広く蔓性植物の総称、真葛とも言われ

るクズはその中の一種とされていたことが知られる。なお、この類立
てを見て、葛は草でも木でもないのだろうか、との素朴な疑問がわく。
鎌倉中期に成った『塵袋』に、「藤八木力草力。草ヲ篇ニシタガヘタ
リ。カツラノ類ナレバ草ナルベシ。……藤ヲバハキ（藤木）トモ云
フニコソ。……仁和寺ニモフチノ木ト云フ所アリ。」（巻三、「藤木」）
などであるが、現代的な戸惑いにも近い。しかし、古代の葛とは、と
もかく草木とは別類に立てるほどのものだったのである。

さて、「クズ・カツラ・フチ」と挙げてきた「葛」の多訓の問題か
ら注目されるのは、和名抄で一項だけ「馬鞭草」に付けられたクマツ
ツラ、という名である。この「ツツラ」は、

八つ目さす 出雲、たけるが 佩ける太刀 ツツラ多巻き さ身

なしに あはれ

（景行記歌謡）

出雲の国は、狭布の稚国なるかも。……霜黒葛くるやくるやに、

河船のもそろもそろに、国来国来と引き来縫へる国は、

（出雲国風土記 意宇郡）

御方の里。御形と号くる所以は、葦原志許平命 天日槍命と、黒

土の志爾高に到りまし、各 黒葛三糸を以て、足に着けて投げま

しき。 （播磨国風土記 穴木郡）

等と出て、とりわけ出雲との関わりが深そうである。万葉集では、東
歌の中に、「ハマツツラ」（三三五九）、「アソヤマツツラ」（三四三四）

という仮名の二例が見られるが、「葛」の正訓となるような場合は見
出せない。ツツラの漢字は、平安期の辞書である名義抄が「黒葛・累
葛」を挙げ、色葉字類抄は「黒葛」のみである。ただし、日本霊異記
（中巻 第四）に「熊葛の練鞭」という物が見え、和名抄の「クマツ
ツラ（馬鞭草）」とも見合わせてクマ・ツツラと訓まれている。

霊異記（下巻 第十三）には、「葛」について興味深い記述が見え
る。奈良の孝謙天皇の時代、「官の鉄を取る山」で崩落が起こり、穴
の中に閉じこめられた「役夫」が、法華経と観音の利益によつて
助かる話だが、実際に助けたのは、たまたま「葛を取らむとして山に
入」つて来た三十余人で、その救助法はつぎのようであつたという。

葛を取りて石に繋ぎ、底に下して試みる。底の人取りて引く。明
らかに人なりと知る。葛を結びて縄とし、葛を編みて籠とし、四
つの葛、縄を以ちて籠の四角に繋げ、機を穴の門に立てて漸く穴の
底に下す。底の人籠に乗れば、機を以ちて索き上げ、持ちて親の
家に送る。

この「葛」は、カツラと訓むべきかツツラと訓むべきか、正確には
不明だが、葛の実用性がよく語られている貴重な記述である。神武即
位前紀等には、先住者ツチグモを皇軍が「葛の網」で捕えて殺したな
どももあり、要するに「葛」とは、縄ないし綱、それを編んだ綱や籠
といった日常生活に不可欠の多用途の素材であり、奈良時代も、民間

では、その採取・製造に三十余人もの集団で取り組む価値のあるものだったのである。葛のさらなる訓「ツナ」は、そうした用途に関わるものとして、つぎのような例がある。

引き結へる葛目の緩び、取り巻ける草の噪き、御床つひのさやき、
 夜目のいすすぎ、いづつしき事なく、
 (祝詞 大殿祭)
 久久紀若室葛根神(スサノヲの子の大年神の子)
 (神代記)
 (天皇)室寿して曰はく、「築き立つる 稚室葛根 築き立つる
 柱は、此の家長の 御心の鎮なり。
 (顯宗即位前記)

大殿祭祝詞では、右の直前に出る「下津綱根」に、「古語に番繩の類、之を綱根と謂ふ」と割注があり、ツナネとは、家の柱と横木を組んでツナで結んだ結び目をいう、おそらく出雲系の古語であろう。またナハとツナも、同じ物を指すが、出自の異なる別語だったことも明言されている。とまれ、古代、その盛んな生命力を頭にカツラク呪法とは別に、柔軟で強靱な「葛」の蔓の、いわゆる縄・綱としての多様な有用性が「葛根神」という神名に残されたのでもあった。

ところで、隋書倭國傳には、倭國は百濟から仏經を求得するまで「無文字、唯刻木結繩」であったとされている。この「結繩」は、右に見てきたところからも葛の縄を結ぶものだった可能性が高いだろう。「結繩」が、広く世界各地の無文字社会において一定文字的な機能を果たしていたらしいことはある程度知られている。言語学大辞典別

巻(三省堂)によれば、漢籍等の古文獻からその詳細を知ることが難しいが、比較的近来に伝わった台湾のそれや沖縄の「藁算」等によれば、数やその記憶に関わる用が主だったかと思われている。隋書に言われるように無文字時代の日本に「結繩」文化があったにしても、その実態や機能について、文字資料上に触れられるところは一切ない。ただ、わずかに手掛りになるのは、歌に伝わるつぎのような慣用表現と動詞「繰る」による半は無意識の口承である。

延ぶ葛の いや遠長く、万世に 絶えむと思ひて(万葉 四三三)
 玉葛 いや遠長く、祖の名も 継ぎ行くものと (同 四四三)
 荒玉の 年の緒長く、照る月の 厭がざる君や 明日別れなむ
 (同 三三〇七)
 いづれぞも泊まり かの崎こえて み山の小つづら
 くれくれ 小つづら、
 (神楽歌 早歌)

右の万葉歌では、「延ぶ(延ばした)葛」や「玉(のついた)葛」そして「年の緒」が、過去や将来の遠長い時間のイメージを喚起して歌われている。また、神楽歌のツツラを早く「繰る」とは、おそらく先へ先へと神楽次第を早く送って、「いづれぞも泊まり」という待ち遠しい「時」にたどり着けるといっているのではなかっただろうか。

「くぐる」とは「霜黒葛くるやくるやに」の国引き神話の昔から、もともと長い葛(縄)・緒・糸等を手繰ることである。ところが(日を)

「繰り延べる」・(日程を)「繰り上げ、繰り下ろす」・(翌日に)「繰り越す」・「繰り出す」・(事を)「繰り返す」・(想いを)「手繰り寄せる」といった熟語表現がなせ現代語にも残っているかは、「繰る」という行為が日を送ることに深く絡んでいたからではないだろうか。つまり、葛に結び目や荒玉を付けて、それを「くりくり」送り延べ、一定の長さで「くり返し」て「ヨミ」(日読み)としていた、はるかな日々の名残りの言葉遣い、ということである。

無文字時代の「ヨミ」には、「刻木結繩」の「刻木」もそれであった可能性があり(岡山市国体町南方遺跡出土、小著『古層日本語の融合構造』参照)、また、スサノヲとと共に天照大神の今一人の弟とされる「月読命」の名に遺された月齢を、「ヨム(数える)」ことも、当然行われていたであろう。しかし、大陸の文字で組まれた精緻な暦法のことを知って、欽明紀の仏教伝来の記事と同じ頃には、「暦本」を百済に求めた由の記事も現れる。そして、正史に「始めて元嘉暦と儀鳳暦とを行ふ」と記されるのは、持統紀四年十一月であるから、記紀万葉編纂の時代、往古の稚拙な「ヨミ」のことなど、もはや触れたくもななく触れる必要もないというわけで、時の彼方にむなしく消え去ったのであった。

YAMATOKOTOBA and Ancient Japanese

Noriko Kimura